
還らぬ彼女 ~ I won't to left you.

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

還らぬ彼女 I won't t o l e f t y o u .

【Nコード】

N 2 3 1 3 F

【作者名】

紅魔館雑務総括

【あらすじ】

不死と死と言う超えられぬ壁の向こうに彼女は逝ってしまった。
・・・妹紅と慧音、悪役に輝夜とか永夜組。少々『やばいんじゃない?』と思うところもあるかもしれませんが、演出です。仕様です。

終わりの始まり〜Scheme・(前書き)

タイトルの「I didn't leave you」は、「離したくなかった」と言う意味です。

冥界寺吹雪氏の『永夜の報い〜Imperishable Night』がえらく気に入った方は、全く別の物語としてお読みください。ええ、輝夜は悪役ですから。

終わりの始まり〜Scheme・

彼女の軀が眠っていない彼女の墓で、私は泣いていた。

ああ、こんなことならあの時、貴女に一言『好きだ』と言っていればよかった。

帰ってくることの無い彼女に恋焦がれ、紅葉が肩に、頭にかかるのも忘れ、ただ泣いていた。

こうなるんだったら、貴女をもっと、抱きしめておけばよかった。

大好きだったよ、いや、大好きだよ・・・慧音

永夜異変・・・それから一ヶ月と経たぬ内に、秋は幻想郷を包んだ。

相変わらず私は、人間の里に住む、慧音の世話になっていた。と言っても、これももう数年にもなるのだが。

『私のところに、来ないか？・・・ちようど、家事が忙しすぎるんだ』

あの時、私はどれだけ歓喜したか。

住むところが見つかった、と言うだけじゃない。

私を、『不死の蓬莱人』『化け物』としてではなく『私』という存在として見てくれた奴が、いたこと。それが、何より私を喜びで満たした。

それから、私は輝夜との殺し合い以外の時は、私は慧音の家の家事に勤しんだ。

洗濯、掃除、食器洗い・・・慧音の書いた歴史書の埃をとったりもした。

そのうち、近所の人たちとも少しずつ打ち解けていった、

「もこちゃん！　ちよつとこの食器の汚れがとれないんだけど・・・

！」

「ああ、これね。これは、金束子かなたわしで、こうやって傷がいかないように・・・つと、これで大丈夫」

「ありがと、助かるわもこちゃん」

「そのあだ名を止めてくれたらこつちも助かるんだけどね・・・」
なんてこともしばしば。

慧音は、寺子屋で子供達にこの幻想郷の歴史、生きていくためにある程度必要な知識などを授けている。

いつもへとへとになって帰ってくるから、夕飯の作りがいがある。

——月にした頃とは、比べ物にならないほど、幸せだ。
あの頃は、ただ『この日は刺客がこなければ幸せ』などと思っていた。

でも、この生活になってからは、刺客に怯えることもなくなった。

今は、刺客など来てもただ蹴散らせばいいと考えている。

そうしなくては、今が壊れてしまうと思ったから。

そんなことはさせない。

絶対に。

・・・今の私には、慧音がいる。大好きだけど、でも、この気持ち
を伝えられない。

何故だろう。『今』の崩壊を恐れているのか、それともただ単に恥
ずかしいだけなのか。

どちらにしても、言えない事実はあるのだ。

願わくば、この気持ちを伝えられるときが来るように・・・と、切
に想う。

「ただいま、妹紅！」

「あ、お帰り、慧音！」

打てば響くように、阿吽の如しタイミングで私は慧音に迎えの挨拶をかけた。

「く・・・またか・・・」

少し、慧音は不機嫌な顔をした。

「どうしたの？ 慧音」

「また、私を生殺しにするか・・・」

ああ、またいつもの『あれ』か。

「・・・くす・・・！」

私は、つい笑い出してしまった。

「な、何?! 本当だよな?!」

「だって、慧音、大げさだから・・・！」

「そんなことはない！ だって妹紅の晩御飯の香りが部屋中に截ち込めているにも拘らず、まだ肝心の晩御飯にありつけない・・・これは、生殺しと言わずになんとと言える?!」

「さあ？ 『お預け』？」

「なっ・・・！ 的確な・・・！」

会話をしているうちに、釜に入っていた最後の一品が完成した。

「・・・ん。大丈夫みたい」

「心配しなくても、妹紅の料理は私のお墨付き、だ。味見はいいから、早く配膳をっ！」

「急かさない急かさない。ほら、慧音、運んで」

「・・・何だか、いつもに増して色とりどりな気が・・・」

「まあ、今日は『妖怪の山』のアポの日だったし、山菜摘みに言っ
てたんだ。だから今日は、割と多いでしょ？」

「煮びたし・・・漬物・・・味噌汁・・・言われてみれば山菜が多
いな・・・^{ぜんまい} 薇の浸しまで・・・」

「さ、食べようか」

「ああ・・・戴きます」

「はい、戴きます」

「・・・ありがと、妹紅」

「え・・・？」

「ほら、いつも、こんなに美味しいもの作ってもらってさ、礼の一つもできないなんてさ・・・なんか、私としても、その・・・」

「いいよ？ そんなの気にしなくて。この家に置いてもらってることの、せめてものお礼、だもん」

「そう、か？ まあ、妹紅が、そう言うんだったら・・・いいが。でも、本当にありがとな」

「うん」

何だか、今なら、言えそうな気がする。・・・慧音が、好き、だつて・・・。

「ねえ、慧音」

「ん？」

「その・・・私・・・」

「何だ？」

「・・・・・・ううん、やっぱり、なんでもない」

「そ、そっか・・・」

無理！ 無理無理！ やっぱ、恥ずかしい！

「ちっ・・・」

その背後からの気配に、私は気付いていなかった。

「妹紅の奴、あんなに楽しそうに・・・！」

場所は変わり、永遠亭。

八意 永琳が主人を務める、薬屋の名称・・・と同時に、蓬莱山輝夜の、揺り籠ともなっている。

他にも妖兔達の棲家や病院など、用途は多様だが。

「えーりん！ ちょっと、どこー?!」

「何のようですか、姫様。少し忙しいのですが」

パタパタと病院によくあるスリッパを靴の上に履き、八意 永琳は慌しそうに走ってきた。

「妹紅を振り向かせたいんだけど」

「・・・はあ？」

「だから、妹紅を・・・」

「いえ、そうではなくて、姫様、いつから妹紅を？」

「いつだっていいでしょ？ それより、媚薬でも惚れ薬でも自白剤でもいいから、妹紅を振り向かせる方法を教えてよ」

永琳の袖を掴み、輝夜は必死の眼で言い寄る。

「薬で人を振り向かせるなんて、邪道ですよ姫様。それに、自白剤では・・・」

眼をそらして口元を不自然に歪めつつ、永琳は諭す。

「むう・・・えーりんまでそんな事を・・・」

「あら？ 姫様、他の誰かにお聞きになったのですか？」

「え？ あ、まあね。おんなじことをイナバと因幡に聞いたんだけど、どっちからもおんなじ答えが返ってきたの」

見当違いの答えが帰ってきたことで、輝夜はしょんぼりと顔を下に向けた。

「そりゃそうですよ。・・・私は、恋をした人を何人も見てきましたけど、そういう卑怯な真似をした人は必ずうまくいきませんでしから」

「そうなの・・・？ じゃあ、どうすれば・・・」

「まあ、相手は姫様の事を敵視してますからねえ・・・」

永琳が、腕を組んで悩みの仕草をとる。

「んー、じゃあ姫様、家に泊めてみる、というのはどうでしょう？」

永琳の意図する先を、輝夜はどう受け取ったのか。

「家に泊める・・・ねえ。・・・悪くはないかも」

「そうですか・・・では、私は少し忙しいので、失礼します」

「あ、引き留めてごめんなさい、えーりん」

「いいえ、別に大したことはございません」

「ちよつと、えーりん。もう一つ、いい？」

「な、なんですか？」

「・・・そのスリッパ、靴を履いてる時は履かないものなのよ」

「・・・」

憎敵からの誘い〱 Opportunity・(前書き)

輝夜、行動開始・・・!!

憎敵からの誘い Opportunity .

「じゃあ、行つて来るな、妹紅」

「ん。いつてらっしゃい」

鞆を抱え、慧音は駆けだしていった。

「さて、洗濯でもしようかな・・・」

少したまつてしまった衣服と大きめの桶を持って、梃子式井戸へと向かった。

「ふふ」

泡が空に舞うのを眺めながら、洗濯板に服を擦り付けていた。

洗濯物が綺麗になつていくのつて、なんかいいなあ・・・。

だんだん、自分の洗ったところが元の色に戻つて、黒や茶の汚れが落ちて、時には紺色に、時には緋色に、綺麗に洗われていく・・・。
うん、こんな感じかな。

私は、洗濯物をばつ、と広げて、その後すぐに井戸の梃子を押して、水を出す。

泡を落とし、適当にはたいてから、竿にかけて、干す。

「ふう・・・」

手を振つて水を落とし、次の洗濯物にかかろうとしたとき。

「仕事中ごめんなさいね、妹紅」

「・・・輝夜・・・!」

背後から、どうしようもなく嫌い・・・いや、私にこんな薬を飲ませたんだ。憎いとまで言つてもいい・・・蓬萊山 輝夜の、声がした。

「今日・・・戦らない? 満月なのよ、今夜」

「・・・いいだろう・・・時間と、場所は?」

「場所はいつもの『迷いの竹林』、時間は・・・子の刻でどう?」

「・・・わかった・・・とつとと、去れ。私は、洗濯物で忙しい」
「・・・んもう、つれないわね、妹紅。もうちょつとお話したって・・・」

「消えろ！ 時間を設けているのに、それ以外の時に私に殺された
いか？！」

「・・・いいわよ」

「い、今、なんと・・・？」

「貴方になら、殺されても・・・」

「え・・・どういう、意味だ・・・」

「・・・ん。なんでもないわ。じゃあ、とつとと消えるわ」
踵を返し、軽く足踏みをして、空へと輝夜は飛びたっていった。

「何だっただらう・・・最後のは・・・」

少し頭の隅に置いて、次の洗濯物を手にとった。

あ・・・慧音のドロ（ry

その日、私は少し早めに自分の夕食をとり、慧音が帰ってくるのを待った。

「た・・・ただいま・・・」

「大丈夫？ 何か物凄く疲れてるみたいけど」

「まあ、な・・・今日は、特別騒がしかったから・・・」

「・・・あ、慧音。私、今日は・・・」

「満月だらう？・・・今日は、輝夜と殺し合いか・・・」

「う、うん・・・だから、もうご飯できてるんだ」

「そうか、助かる」

「まあ、そんなにすごいものでもないけど・・・」

「お前の作ったのなら、何だっていいさ」

私は、慧音の食事を食卓に並べ、靴を履いた。

「じゃあ、私はそろそろだから・・・」

「行つてらっしゃい、妹紅」

「行つてきます」

朝、慧音の駆けだして行つた要領で助走をつけ、空へと勢いよく飛び立って行つた。

「さて・・・時間通り。夕方から出かけてスペルカードを大量にするのに時間がかかったかな」

「あら、珍しいわね。あなたが時間通りに来るなんて」

「無駄口はいい。さつさと始めるぞ・・・」

「はいはい、せっかちなのね、以外と」

「不死『火の鳥・鳳翼天翔』!!」

互いが互いを殺し、殺される覚悟で行われる勝負は、熾烈を極めた。

「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』!」

「不死『徐福時空』!」

「難題『火鼠の皮衣・焦れぬ心』!」

「『フェニックス再誕』!」

「『蓬莱の樹海』!」

虹色の光が、紅蓮の炎が美しく、また醜く交差し、その身を滅ぼさんとするそれらを一つ、また一つと、二人は避けかわし続けた。

「はあっ、はあっ・・・もう、夜明け、か・・・」

私と輝夜は、竹林の陰から覗く、僅かな陽光に夜明けを確認した。

「で・・・はっ、どっちが、勝った、わけ・・・?」

終了の合図となるその光を見ると、輝夜は勝敗を私に問う。

「さあ、どっちだろうな・・・」

「すうっ・・・はあ・・・よし、一回深呼吸したらだいぶん楽になっ

た。ところで妹紅」

「・・・すう・・・はあ・・・駄目だ。まだ、お前につぶされた喉がちゃんと治ってない。・・・で、なんだ？」

喉をさすりながら、私は輝夜を促す。

「あのね・・・今度、永遠亭に泊まりに来ない？！」

「・・・率直な感想は、

「はあ？」

何の冗談だ？

「・・・なにそれ。私は、真剣なだけど！」

「いや、いくらお前が真剣でも、お前のところに泊まりに行くのは・・・正直、嫌だ」

まあ、だって、こんな、私にこの薬を飲ませた張本人だぞ？
そう簡単に、懐柔するわけないし・・・。

「どうしてよ！」

「お前が、私をこんな体にしたんだぞ？！ どの口がそんな事を言える？！」

「じゃあ、貴女はあのハクタクに会わなくてよかったの？！」

「っ・・・それ、は・・・」

またこいつは痛いところをついてくる・・・。

「だったら、あのハクタクの分を帳消しにするために・・・だったらどう？」

「く・・・私が借りを嫌うのを知っていて・・・」

何なんだこいつは・・・とことん、卑怯だな・・・。

「私の眼を見て！ 貴女をどうにかしようと考えている眼に見える？！」

「憎悪補正がついて、そう見える」

「何それ・・・！ 貴女が嫌いだったら、わざわざ自分の陣地に呼び込んだりしないわよ！ 私が今どれだけ気を張ってるか、貴女には解る？！」

「わからん。正直、全くわからん」

でも、なんとなく、輝夜の言うことが、敵意抜きの本気であることは、多少なりとも伝わった気がする。

だからこそ、こちらが、少しだけ気を許したんだと思う。

「・・・でも、まあ、慧音の件の借り、ってことで、お前の頼みを聞いてやらんこともない」

「・・・じゃあ！」

「行ってやってもいいぞ、お前のうちに」

「やったー！　じゃあ、今度の水曜、酉の刻に永遠亭に来てよね！

約束だからね！」

「・・・ああ、わかったよ」

慧音に、これを話すの、物凄く気まずいかも・・・。

「・・・ねえ、慧音」

「何だ？　妹紅」

「あのさ、私、今度の水曜に・・・」

「ちよつと待て、言うなよ・・・？」

私の顔を、じつと見つめて、そしてそれからやつと言葉を紡いだ。

「どこかに泊まりに行く、ってところだな？　・・・むむ。その顔で言うなら・・・永遠亭あたりか」

「な、なななっ？！」

い、いくら私と付き合いが長いからって、そんな、そこまで正確に私の心が読めるの？！

「そうなんだろ？」

「そ、そうだけど・・・行っても、いいかなあ？」

わざと少しおどけて見せて、慧音に言葉を促す。

「まあ、ほんの一日くらいお前と離れるくらいだったら、大丈夫だが」

「ほんとに？　ありがと、慧音」

「でも、どうして敵の陣地なんかに行くんだ？」

「その、輝夜に、『貴女には貸しがあるから』って、そのお返しに、

みたいな感じで・・・」

「まあ、やりかねないよな、あんなのだから」

「って、知ってるの？」

「え？ いや、まあ、お前の話を聞く限りでは・・・そうかな、って思っただけだ」

そして、その水曜はあまりにも早く訪れた。

望まないにも拘らず、残酷なまでにそれまでの時は楽しくて。

訪れるその日が、怖かったただけかもしれない。

「じゃあ、行つて来るね」

「ああ、行つてらっしゃい」

「・・・明日の朝ごはん作ってあげられなくて、ごめん、慧音」

「別に一食くらいなら自分で作れるさ、心配するな」

「そう、だよな。うん、じゃあね」

最後は、黙って手を振つてた。

ううん、最後じゃなくて・・・最期、だね。

あんなことが起こるなんて、このときは・・・予想もしてなかった。考えもしなかった。

だからこそ、私は、輝夜が憎くてたまらない。

このときよりも、何倍も・・・何十、いや何百倍も憎くて憎くて、仕方ないんだ。

・・・行かなければよかったんだ、永遠亭になんて。

憎敵からの誘い〱 Opportunity・(後書き)

文「まだMHP2Gやってるんですか？ 貴方も飽きませんか」

僕「ああああ．．．」

文「どうしたんですか？」

僕「キリン．．．男装備キシヨイ．．．ルーツ頭とあわせたらもつとキモくなった．．．」

文「．．．．．」

僕「女でやったら．．．まあ頭はキリンだけど．．．凄く可愛かったのに．．．」

文「そんな事を考える暇があつたら新聞のネタ作りをして下さいこのヘタレ」

僕「称号は『キリン纏うヘタレ』だから別に痛くも痒くもないね」

ごめんなさい

永遠亭へ eternal youth・(前書き)

慧音、慧音ええええ!!

いやなんでもありません

永遠亭へ eternal youth .

「妹紅！ よく来たわね！ さつ、上がって上がって！」

「やたらハイテンションだな・・・」

「だって、こないと思ってた貴女が来たんだもの！ そりゃあハイテンションにもなるわよ！」

私の手を引いて、輝夜は長い長い廊下を歩く。

異変の時の広さはなく、術もかかっていないただの廊下だ。

「あのね、この階段を降りて・・・」

と、明らかに地下牢か何かの階段へ引く。

「ちよつと待て、この下には何がある？」

「え？ 私と貴女の寝室だけど？」

「嘘つかないでよ！ 絶対違うでしょ！」

「えええええ！ いつもここで寝てる私の身にもなってよ！」

「知らないわよそんなの！」

「とりあえず降りてみてつて。・・・貴女には貸しがあったわよねえ？」

「むむう・・・」

とことん卑怯な奴め・・・！！

従うしかないか。いざとなれば出ることなんて容易いし。

「わかったわよ、降りればいいんでしょ」

「そうこなくっちゃ！」

そして降りた先には、確かに寝室があった。

それも、割に華美な。

「それでも、私はここでは『姫様』だからね。この位の部屋はあるわよ」

「おお・・・」

感嘆の一言。

「じゃあ、ここに寝巻きとか置いて、ちよつと遊びましょ」

「……何をして？」

「弾幕ごっこじゃ雰囲気ぶち壊しだし……適当にイナバでも捕まえて、カードゲームでもやりましょ」

「そうね」

「おい、イナバー！」

「……姫様……と、妹紅だっけ？」

うさみみの学生服の女の子が、こつちを向いた。

「そうそう。始めまして、……えつと？」

「『鈴仙・優曇華院・イナバ』です」

うつわ……長い名前。多分月の民かな。やたら長い名前が月地
上の名前に多いし。

「よろしく、鈴仙」

「ねえイナバ、私たちとカードゲームでもやらない？」

「……べ、別に構いませんが……」

「やった！　じゃあ、貴女の部屋に行きましょう！」

「私の部屋で……するんですか……」

「当然。カードをなくすと落ち込むでしょ？」

「ま、まあそうですけど……」

「決まりー！　さあさ早くして！」

輝夜が、鈴仙を急かして私を案内した。

それから、私と輝夜と鈴仙は「ポーカー」とか「バックギャモン」とか、よくわからないカードゲームをいろいろやった。

一応、ルールは説明してくれたけど……まあ、私が負けるのは目に見えていて。

「ううう……ぜんぜん勝てない……」

「まあまあ、ルールをさつき知ったばかりの妹紅に勝たれちゃ私たちの面子が……ってなっちゃうでしょ」

「ですよー。あ、でも『ジジ抜き』なら知ってますよね？」

「あ・・・それならわかる」

「じゃあそれやろう！」

一枚抜かれて、カードが配られる。

「言っとくけど、私たちのこのカードは不完全であるとはいえ、ある程度記憶してるから・・・妹紅にはちよつときついゲームになるかもよ？」

「・・・ふ、臨むところよ」

順は『鈴仙↓私↓輝夜』の順になった。

「さて・・・」

私から鈴仙が、ハートの11を抜き取る。

「つよし！」

そして、11を捨てる。

ちなみに私の手は、ハートが2・6、ダイヤが1・5・4の五枚。

「ふふふ・・・さて、どれが『2』かしらねえ？」

「っ・・・！ 何でそれが?!」

「一番左端・・・ハートの2でしょう？ ジジはわからなかったけど」

「く・・・」

確かに、このゲーム、私が不利ね・・・。

「これ、じゃないかしら？」

「っ!!! そ、そう？ もうちよつと吟味したほうがいいんじゃない？」

い、今輝夜が動揺した！ これだ！

そのカードを引き、こちらへ向ける。

・・・ダイヤの、3・・・

「騙された！ やーい、間抜け！」

「・・・く、くく・・・」

れっ、鈴仙まで・・・！

負けないんだから・・・っ！

私は、後二枚まで持つて行っただけど、結局輝夜に一着されて、やる気がなくなつた鈴仙の所為で、ジジ抜きは中止になつた。

「姫様、こんなところにいらしたのですか？ お食事の用意ができました。・・・妹紅、ウドンゲ、貴女達もいらっしゃい」
えっと・・・確か、八意 永琳とかいったわね・・・夕食ができたみたいで、呼びに来た。

「ほら、食べてっ。貴方が来るから、えーりん頑張つてもらつたのよ」

「自慢できることでは・・・」
「すっ、すごい・・・」

食堂に置かれていたその料理の数々。

一品一品、私がずっと昔に月で目にした料理と合致する。懐かしい思いに浸りながら、私はそれを噛み締めていた。

「ふふ、どう？ 懐かしいんじゃないかしら」

「ほんとに、こんなの見たのは何百年ぶりかな・・・」

私は、それで月にいた頃を思い出した。

一番新しいのは、『薬』の解薬を探したとき。
『いたッ！ そこだ、追えーッ！』

そして、月の私の家で、一言放たれた言葉。

『地上から上がってきたんだってな。『蓬萊の薬』を飲んだからって、粹がんなよ』

宮殿の帝が、蓬萊人と認めてくれたとき。

『我々は、貴殿を蓬萊の民と認め、月への移住を許可します』

地上で、薬を飲まれた直後。

『ねえ、妹紅？ 不死になった気分はどう？』

その、すぐ前。輝夜は、クスクスと笑っていた。

『これで貴女も、蓬萊人の仲間入り・・・』

鎖に繋がれた腕を振り、もがいていたときの私。

『やつ、やめろッ！ 私は、不死になど・・・ッ！』

いい思い出は・・・あんまりないな・・・。

本当に、慧音に会うまでは絶望的にサイクルの小さな生活だったな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「妹紅？」

「あ・・・・・・・・」

「どうしたの？ 昔でも思い出してた？」

「ま、まあね・・・・・・・・」

所詮、昔は昔。これ以上思い出すのはやめておこう。

そして、しばらくしてから。

私は、輝夜に無理矢理牽かれて大浴場へと連れられた。

「おつきいでしょ？ 自慢のお風呂よっ」

「・・・・・・・・うわぁ・・・・・・・・」

ただ広いだけではない。浴槽には檜が組み込まれ、床は石造りだったりする。

「ま、永遠亭は幻想郷屈指の大きな建物なわけだし、これくらいはあつたりするわよ」

「すごいんだな、輝夜って」

「……別に、私がすごいわけじゃなくて、えーりんとか因幡とかが頑張っただけよ」

場所は変わり、人間の里・慧音（と妹紅）の家。

「さて……明日の予習でもしておくか……」

机に自作の教科書を広げ、そこに要点などを追記していく。

「えっと、ここは範囲外だな……ま、おまけ程度に説明……つと」

そこへ、突然、扉をたたく音が。

「……夜も更けているのに、誰だろう……？」

扉を開くと、そこには赤と紺の不思議な服を着た銀髪の女性が立っていた。

「ごきげんよう、貴女が上白沢 慧音ね？」

そしてその女性は、慧音の名を躊躇なく口にした。

「なぜ、私の名を知っている？」

当然、慧音はそのことを怪しんだ。

「うちの姫様が、貴女のところの妹紅にご執心なのよ」

軽く腕を組み、『内心ちよつと呆れてる』と言う表情。

「輝夜、といったな……その姫様は」

「そうよ。それがどうかした？」

「いや……別に。ところで、何の用だ？」

「姫が構ってくれなくて、暇なのよ。だから、暇な奴同士お茶でも、思ってね」

そう言っつて、ジャム瓶程度の大きさの瓶を取り出す。

そこには、数種類の茶葉をブレンドしたかと思われる葉が詰まって

いた。

「自家製。薬師が作ったからって、ただ体にいいだけじゃないんだから」

「……………上がれ、茶請けを用意しよう」

「それじゃ、お邪魔します」

上白沢 慧音とは、割と明朗な人間だ。急に来た初対面の人間にも、このような態度が取れるのも、彼女の性格だろう。

永琳は、靴を脱ぎ、慧音の家へ入っていった。

それが、全て、輝夜の策略とも知らずに――。

風呂に入ってから、輝夜の部屋に戻ってきた。

「意外と体格に乏しいわね、妹紅」

にやにやしながら輝夜が笑っている。

「うっ、うるさい！ 輝夜だってそうでしょ！」

「ああら？ 私はそれだけの歳に『蓬莱の薬』を飲んだんだから、当然なんだけどねえ？」

そう言って、輝夜はパタン、カチリと扉の鍵を締める。

「さて……………そろそろ、なんじゃないかしら？」

さつきと、輝夜の雰囲気が変わる。

妖艶さが、僅かに垣間見える。

「……………え……………？」

そう言われたたとたん、頭がぐらりと揺らいだ。

「か……………ぐや……………」

体が熱くなる。視界がぼやけてくる。

「大丈夫？ 妹紅。クスリは、効きすぎてない？」

「ク……………ス……………リ……………」

輝夜が何を言っているかわからない。

くらくらする。呼吸できない。・・・たっていられそうもない。
かぐやがちがついてきた。

「大丈夫みたいね。くすっ・・・」

とん、とかぐやがわたしをとびらへおす。

ちからがはいらない。せなかで、とびらへもたれた。

「えーりんに頼んだのよ、貴女と私の食事に、催淫薬をいれて、つて」

ああ、だからこんなにくらくらするのか・・・。

「私のはかなり少量だけどね。効果は、酒と同じくらいなのよ」

かんかくが、しこうが、しびれてきた。

なにもかんがえられなくなってくる。

「妹紅・・・」

かぐやのほおがちかい。わたしの、みみでもかんでいるんだろうか。
ぺたり、とわたしのどこかをさわっている。もう、どこをどうさ
れているのかもわからない。

ふと、けいねのかおがうかぶ。

ちよつとあいたいな・・・けいね。

「・・・ああ、あのハクタクならえーりんと一緒よ。お茶で
も飲んでいるのかしら」

「え・・・？」

けいねが、あのひとと・・・？

「向こうは向こうで、仲良くやってるみたいだし、ね。こっちはこ
っち、楽しみましょ」

けいね・・・。

すこし、かなしい。

ううん、すごくかなしい。

さみしいよ、けいね。かぐやといっしょでも、けいねがいなきや・・・。

めのまえがにじんできた。ほおがつめたくなってきた。

「妹・・・紅・・・？」

「・・・・・・・・私に熱を上げるなら、好きにすればいい。でも、私は・・・私が好きなのは、慧音だ」

頬を伝っていく涙が、私を覚醒させる。

（慧音・・・慧音・・・っ、会いたいよ・・・！）

「・・・・・・・・なんだか、私も、覚めてきちゃった。・・・・・・・・

蓬萊人には、効きにくいのかしら・・・」

輝夜が、私から身体を離す。少し悲しそうだ。

でも、私はそんなことにしない。

「もういいわよ、貴女の気持ちはわかったわ。あの催淫薬で駄目なんだったら、梃子でも動かないってえーりんが言ってたわ。駄目なら、諦めて・・・って」

俯いて、奥歯を噛み締めて言う輝夜。

「・・・・・・・・私は、私をこんな身体にしたお前を、許すつもりはない」

「わかってるわ」

「でも、お前が私に好意を持ってくれたのなら、それに誠を以って答える必要がある」

「・・・・・・・・」

「言つて、輝夜。私を、どう思っているか。私は、それに答えなくてはいけない」

それは、この場には到底似合わない、厳かな告白。

「・・・・・・・・妹紅」

それでも、輝夜は、「言う」苦しみに耐えている。

「私は・・・・・・・・」

私への感情。それを確かに、誠意を持って示そうとしている。

「貴女の事を……………」

ならば、私も同じ誠を以って示す必要があるだろう。

「好き」

長い溜めの後、輝夜は掠れた声で告げた。

「……………そうか」

小さく呟いて、決めていた、双方理解しきっていた答えを、紡ぐ。

「すまない、輝夜。私は、お前を好きにはなれない」

「……………そう」

「……………帰るよ、慧音が待ってる」

「……………ええ、お好きにどうぞ」

髪のリボンをきつく結びなおし、

「じゃあね、輝夜」

「ええ、妹紅」

私は、永遠亭を後にした。

慧音自宅。

「……………なん、だ……身体が……うご、か、な……」

彼女は湯飲みを握ったまま、わずかに動かせる口を動かし、言葉を吐く。

「……………」

それを、ただ冷たい目で見続ける一人の薬師。まるで、その最期を平然と待つように。

「えい、り……っ」

手を伸ばそうと必死に腕に力をこめるが、逆に固まっていく。

「あ………」

口も動かなくなり、後は心停止を待つのみとなった。

薬師はそれでも動こうとしない。

「………」

そして、全身の力が失われ、湯飲みを倒し、彼女は倒れた。

ゆっくりと、息絶えた上白沢慧音を、薬師は肩に抱え、外に出た。

永遠亭へ eternal youth . (後書き)

神奈子「弓とかダセエwww太刀だろ常考www」

僕「ガノスを麻痺ビン6本で麻痺らせる龍木ノ古弓なめんな太刀厨」

神奈子「弓300回以外ほとんど使ってねえwwwなんだこいつwww」

僕「太刀100ごときがほざくか愚か者め」

ごめんなさい

始まりの終わり〜She dead・(前書き)

ブチギレ妹紅。できるだけ怖く書いたつもりですけど。

始まりの終わり〜She dead.

慧音。

慧音。

待ってて、すぐ行くよ。

少し寒い空を、人間の里へ一筋に飛ぶ。

そして、慧音の家が見えてくる。

「慧音・・・！」

頬を伝う涙も、もう乾いた。

今は、ただ慧音に会いたい・・・それだけだ。

でも、その願いは、叶わなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！！」

「・・・・・・・・あら、妹紅。どうしたの、姫様は？」

慧音の家の前には、八意永琳が、私に振り向いて少し驚いているようだった。

青い布から覗く黒い靴、白い靴下、そして・・・肌。

この服を着ている人間を、私は一人しか知らない。

「永琳！ 貴様、慧音をツ！！」

「まさか、貴方が来るなんてね・・・そうよ、『手を下した』のは私。慧音は、私の毒で死んだわ」

激昂、激怒、憤怒。

身体の内側で、何かに火がついた。

それが、私の全てに燃え移り、『鳳凰』として顕現する。

「はあああああああ！！」

背には紅蓮の翼、手には深紅の炎、身体に纏うは緋色の火の粉。

「貴様、よくも慧音をおおおッ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

轟々と燃ゆる紅い炎を抱えた手を、永琳へとかざした。

問答無用で、私は火炎弾を放つ。

永琳は、それをひらりとかわす。

私は、永琳を手で追い、火炎弾を放つ。

永琳を通り過ぎると、火炎弾は消滅する。

永琳は、私を攻撃しようとはしない。まるで、何かを待っているように。

「えーりん?! まだいたの!?!」

聞き覚えのある声が、背後から。

「姫様!!」

「えーりん、早くその死体、持って帰りなさい!!」

(な、なんだと?! 永琳だけじゃなく、輝夜もグルだ?!)

「どういうことだ、永琳、輝夜ッ!!」

輝夜は、動揺と若干の怒りの表情を浮かべて、永琳を見ている。

「答えるッ!!」

「チ・・・・えーりん、ここは任せて、貴女は行つて!!」

「ですが・・・・」

「行きなさい!! 私の言う事が聞けないのッ?!」

私は、火炎弾を放つ。

「早く! 私が相手をするから!!」

輝夜を確かに捕らえたはずの火炎弾は、虹色の光に弾かれる。

私は気にせず、次々と火炎弾を輝夜にばら撒く。

それは全て、虹色の光に消されてしまう。

それは、さぞ幻想的だっただろう。しかし、今の私には関係ない。

「答える、輝夜!! お前の狙いは、何なんだ?!」

「…………ハクタクを殺してでも、貴方振り向かせる。……それが、私の望み、狙い」

そう言いながら、私の元に降りてくる。

「……………そうよ。私は、そこまでして貴女を側に置きたかったのよ…………」

私は、永琳が飛び去っていくのを横目に見て、手を止める。

「それが、慧音を殺した理由か」

「ええ」

「輝夜。慧音は、蓬萊人ではないんだぞ」

「ええ。私たちと違って、毒を盛れば簡単に死ぬ」

「慧音は、戻ってこないんだぞ」

「ええ。戻ってきてもらっちゃ困るもの」

「ツ……………お前は、何も悪い事をしていないとも言つのか…………?！」

「それを罪と思うのなら、私は蓬萊の薬など飲まないわ」

「そうか……………なら、私は、お前を『消さなくては』いけない……………!」

復讐なんて感情でもない。

罪を認めさせようと言うわけでもない。

ただ、許さない。許せない。許すはずがない。

慧音を、人を殺して、平然としていられること。

それが、許せない。だから、私は、輝夜を『消す』。

殺すわけでも、倒すわけでもなく、『消す』。

「消す…………?」

慧音に教わった、『歴史喰いの秘術』……………力を持たないものでも、事実を操作する秘法。

「お前は、殺すことができない。もつとも、殺せたとしても、慧音と同じ場所に送るなんて、しないがな」

…………紅蓮の翼をはためかせ、掌に炎を浮かばせる。

「……………」

揺らぐ炎の中に、輝夜の顔が浮かぶ。

「・・・消えろ」

呟いて、炎を握る。

「無駄よ」

これで、歴史から輝夜と言う存在が・・・消える・・・はず・・・でも、そこにはまだ輝夜はいる。

「私は、ハクタク自身の力でも『消える』事はない。それに、私は歴史に深く介入しすぎたわ。密接にかかわりすぎたの。だから、私は消えないわ」

「そん・・・な」

行き場のない怒り。捌け口を失った憤り。それが、私の中で蠢き、揺らぎ、暴れる。

「何故、なぜ・・・どうして、慧音が、死ななければ、いけなかったんだ・・・ッ!!」

しゃがみこみ、地面に、炎を纏う拳を打ち付ける。

「戻ってこないんだぞ、ずっと会えないんだぞ・・・!!」

何度も、何度も。その度に地面は紅くなったり黒くなったり、ひびが入ったりする。

「輝夜、どうしてくれるッ?!!」

そして、輝夜を向いて、憤怒と激昂の目を向ける。

「・・・私なら、いなくならないわ」

その言葉が、一瞬、理解できなかった。

「私なら、貴女の側に、永遠にいられるわ」

「だったら何だ?!!」

「だから、私と一緒に・・・」

「嫌だッ!! お前は、私を不死にしたうえに、慧音を殺したんだぞ・・・お前が死ぬなら、今すぐ殺してやるところだッ!!」

「・・・」

輝夜は、目をそらす。

「もついい、消えろ! いや、慧音の遺体を連れて来い!」

「駄目・・・それは駄目」

「何故だ!？」

「私が・・・殺した意味がないわ」

「この期に及んで、まだそんな事を言うか!」

「・・・もう二度と、貴方の目の前に現れない。これでいいのよね?」

そして、輝夜は空へ浮く。

「待て! 慧音の身体を返せッ!!」

輝夜はそれを見殺して、虹色の光に包まれて消えた。

「畜生・・・ッ!!」

そして私は、その場に力なく座り込んだ。

「慧音・・・慧音・・・どうして、貴女が・・・」

泣くための涙も、出そうにない。

悲しいとか、寂しいとか、そんなのもわからないくらい、胸が締め付けられる。

ただ、爪が割れそうになるほど地面を握って、とまらない嗚咽を止めようとしている。

「・・・えぐっ、ひく・・・けい、ねえ・・・」

彼女の名を呟いて、

初めて、

涙が、

一筋、

頬を伝って、

地面に落ちた。

始まりの終わり〜She dead・（後書き）

にとり「今度はパタポンか」

僕「ポン・パタ・ポン・パタ♪」

にとり「ノリノリで緊急回避するな」

僕「ポン・ポン・チャカ・チャカ♪」

にとり「雑魚相手に溜め攻撃か・・・卑劣だな・・・」

僕「フイーバー！ ポン・ポン・パタ・・・あ」

にとり「失敗したからフイーバーも消滅して溜めも無効になったか。馬鹿め」

僕「お前が離しかけるからだろ河童」

にとり「黙れ下衆」

うわちよなにするやめr（ry

永遠の離別 } Alone ・ (前書き)

え？ ああ、比較的にグダグダですね。
気にしないで。

永遠の離別 Alone .

彼女の軀が眠っていない彼女の墓で、私は泣いていた。

ああ、こんなことならあの時、貴女に一言『好きだ』と言っていればよかった。

帰ってくることの無い彼女に恋焦がれ、紅葉が肩に、頭にかかるのも忘れ、ただ泣いていた。

こうなるんだったら、貴女をもっと、抱きしめておけばよかった。

大好きだったよ、いや、大好きだよ・・・慧音

「・・・慧音・・・慧音・・・」

蓬萊の薬を服用した人間にとって、死人とは最も遠い存在。死ぬことも許されず、生きている言いきれない。

私は、慧音の元へ行くことも許されない。

なら、せめてここで、慧音の側で永遠を生きよう。

昔、誰かが言っていた。

墓なんて言うのは、そこに身体が眠ってなくてもかまわない。気持ちの持ちようなんだと。
なら、ここは、慧音の墓だ。身体がどこにあるはずだが、それはもういい。

あれば埋めよう。私が燃やして、灰にして。

「妹紅、妹紅。起きろ」

竹林の果てにある、慧音の墓・・・その近くの竹にもたれて眠っている私を、何かが起こす。

「う・・・ん・・・ん・・・」

「妹紅・・・おい、妹紅」

なんだか、聞き覚えのある声だ。懐かしい、でも最近まで聞いていた声。

「けい・・・ね・・・？」

「ああ、私だよ。ほら、起きろ・・・そう、長くはいられないんだからな」

うそだよ、慧音はいない。死んだんだよ・・・

「閻魔に、やり残した事があるだろうって追い返された。もうすぐ、行かなきゃいけないんだ」

「え・・・？」

「お前に、言いそびれた事があるんだ」

言い、そびれた・・・？

慧音が、私を抱き寄せる。

「好きだ、妹紅。この世界の、誰よりもお前が好きだ」

「え．．．．．え．．．？」

「もう、会えないだろう。でも、だからこそ言いたかったんだ。全部、けじめをつけてから行きたかったから」

「慧音．．．」

「お前の気持ちも、聞いていいか？」

「何がなんだか、わからない。いないはずの慧音がここにいて、私の事が好きだと言っている。」

「．．．．．状況が飲み込めないか？　だったら、夢だと思えばいい。夢の中なら、何でもありだろ？」

「そうか、夢か．．．だったら、わかる。理解できる。」

私は、慧音に抱き返し、

「うん、そうだね」

と呟く。

「私も、慧音の事が、好きだよ。ずっと、言えなかったけど。今しか言えない気がしたから」

「そうか．．．嬉しいよ」

「私は悲しいよ」

「ん？」

「慧音と、せつかく気持ちが通じたのに．．．別れなきゃいけないのは、寂しいよ」

「．．．．．ごめんな。いつまでかはわからんが、白玉楼から見ているよ、お前の事を」

「うん．．．．．」

「じゃあ、私はもう行かなくては．．．．．」

最後に、強く抱き合って、離れた。

私はここに残る。

貴女はどこかに行く。

「あ、妹紅」

振り返って、慧音が言う。

「私にばかり依存するなよ。お前は、一人で生きる強さがあるんだ。……あと、家はお前に託すよ」

「……慧音の気持ちか聞けたんだもん、もう大丈夫だよ。……ちゃんと、一人で生きて見せるよ」

「ああ、頑張れ。じゃあ、今度こそ」

「じゃあね、慧音」

たぶん、これは、本当の意味で永遠の別れ。

「……」

最後の一瞬、私を見て、やさしく微笑んで、慧音は消えた。
「……」

私は、それを笑って見送った。

たとえ、目から雫が幾条零れていようと、私は笑った。

慧音、さよなら。

大好きだよ、ずっと。

もう会えなくても。

貴女の言葉は、消えないから。

私は、貴女を忘れないから。

永遠の離別／A l o n e ・（後書き）

フラン「あーうー」

僕「フラン様、諏訪子さんの真似はやめなさい」

フラン「くろまーくー」

僕「レティさんも駄目です」

フラン「うー」

僕「れみりあー！　ってそれも駄目です！」

フラン「スターボウブレイクー！」

僕「くあwせd r f t g yふじこおーp @「.」

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2313f/>

還らぬ彼女～I won't to left you.

2010年10月12日08時54分発行